

茜色の歌姫



第六部 壬申の乱



壬申の乱 (想像模型)

是^{すめらみこと}天皇、高市皇子に謂^{かた}りて曰^{のたま}はく、「其^それ近江朝には、左右大臣、及び智謀^{かしこ}き群臣、共に 議^{はかりごと}を定^なむ。今朕^{われ}、與^{とも}に事を計^{はか}る者無し。唯^{いとけなくわ} 幼^{こども} 少^{すく}き孺子^{にうし}有^あるのみなり。奈^{いか}之何^{かに}かせむ」とのたまふ。皇子、(中略)奏言^{もろ}さく、「近江の群臣、多^{おほ}なりと雖^{いふ}も、何^{なに}ぞ敢^あえて天皇の靈^{みかげ}に逆^{さか}はむや。天皇独^{ひとり}りのみましますと雖^{いふ}も、臣^{おみ}高市、神^{あまつかみ} 祇^{つかみ}の靈^{たま}に頼^より、天皇の命^{いのち}を請^{まか}けて、諸

將を引率て征討たむ」(中略) 天皇誉めて、手を携り背を撫でて(中略) 鞍馬を賜ひて、悉に軍事を授けたまう。

(『日本書紀』卷第二十八)

第三章 伊賀越え

672

かつて飛鳥留守司は岡本宮に置かれていたが、満々と水を湛える渠がめぐらされた広壯な宮を清らに保つには莫大な財が要る。近江に都が遷りて後は、給される財も減り、渠の水も枯れ果てていた。

大海人皇子が吉野に退いて後、代わって留守司となった高坂王は、皇子が住んでいた河辺宮に入り、政務を執った。岡本宮は廃れ、打ち捨てられた。

河辺宮に近江より駅馬によつて報せがもたらされたのは、六月二十四日。その前日、近江京で蘇我赤兄が誅殺されている。

大海人皇子の一族、ことごとく飛鳥へ迎え、押し込め奉れ。

大友皇子の命に、高坂王はすぐさま兵を動かした。

飛鳥より吉野へは北へ二十里(約11キロ)。山路とはいえ、半日もかからない。百余の兵が甲冑に身を固め、深い樹々に覆われた吉野の山へと入った。

その日の夕、吉野宮へ派した兵の一人が、河辺宮へと駆け戻った。

「すでに、大海人皇子とその一族、吉野宮にはいたまわず」

高坂王は愕然とした。

「い、いづくに……」

「知らず」

「見張りの兵は？」

「ことごとく縄を打たれ、庫に籠められてあり」

その頃、大海人皇子の一行は、吉野より北東へと向かっていた。狭い山道を、名張、伊賀、三重と過ぎ、二百数十里（百数十キロ）を踏破して濃の国の不破に至り、村国男依らが集めた東国の兵と合流する手はずであった。不破から西へ、近江と尾を南北に分ける険しい鈴鹿の山地を越え、近江に攻め入る。それが、軍略のすべてであった。

大海人皇子の一行は、讚良皇女、草壁皇子、大津皇子、忍壁皇子、朴本大國ら十名の舍人、それに、額田郎女が近江から派した二十半ばの土蜘蛛の鮎芽であった。

鮎芽は、大友皇子の派した馭馬より早く、前日の夜に吉野に至った。宮を見張っていた留守司の兵どもを悉く捕らえて押し込め、夜が明けぬ裡に吉野を出た大海人皇子の一行に、そのまま随行したのである。

朴本大國は、吉野から伊勢へかけての獵人を束ねる。彼が集めた獵人どもが、道案内を務めた。すでに日が暮れていた。一行は徒歩で、険しい山路を越え、疲労は極に達していた。

やがて路が下り坂となり、遠くから水の轟きが響いてきた。

「滝が近いな」

大海人皇子が、朴本大國に問うた。大國は頷いた。

「赤目の滝。すなわち、名張の馭家はすでに間近」

皇子は、疲れ切った面差しの一に行に、しばし休め、と命じた。一行は腰をおろし、ある者は滝まで水を酌みにいった。息をついだ後、大海人皇子は、讚良皇女と朴本大國を呼んだ。

「大國よ、名張の郡司の名はと言うたな」

「然り」

大國は頷いた。

「吾とかつて、親しく睦んだ者」

「されば、まず、汝が名張の里に入り、稲置と談合せよ」

「皇子よ」

讚良皇女が口を開いた。

「このあたりにも、すでに近江方の者が入っているやもしれず。土蜘蛛の鮎芽をも派しては如何」

「まさか、稲置が……」

不満げな朴本大國に、讚良は説いた。

「方に一つ、稲置が裏切れば如何する。伴は少なく、稚なき皇子たちもいる。抗うは難い」

すでに日は落ちていた。

この時代、夜に火を灯す風習は、民にはない。名張の里は黒々と静まりかえり、ただ、郡司の住む家と、その近くに置かれた駅家のみ、わずかに明かりが瞬いている。

里に入るや、鮎芽は「探る」とのみ告げ、闇へと消えた。朴本大國は一人、郡司の家の門を叩いた。

「朴本大國か」

郡司の稲置が、見知った貌かほを綻ほころばせ、家に招まねじ入れた。

「狩りで夜道にでも迷ったか。大國らしくもない」

酒を運たばせ対座した稲置に、大國は声を潜ひそめた。

「汝なれに頼たのみがある」

「何か」

「大海人皇子が、赤目の滝近くにおわす」

稲置は驚おどき、膝を進めた。

「何故に皇子が……」

近江方が、皇子に兵を差し向けた……。大國は短く告げた。

「故に、今宵こよひ一夜、寢屋ねやを借りたい」

「是非ぜひもない」

稲置は領りやうき、伴部を呼び、赤目の滝へ行き、大海人皇子をこの家まで案内するよう命じた。伴

部は、松明たいまつを手てに去った。腰を浮かしかけた大國を制し、稲置は、呑め、と杯さかずきに酒を注いだ。

「しかし何故に、近江方は皇子を」

溜息ためいきをついて問う稲置に、大國は応えた。

「分わからぬ」

大國は首を振った。近江で蘇我赤兄が誅殺され、大友皇子が大海人皇子を捕らえるよう命を發したことが、この名張なはりに届いたっているかどうかわからない。たとえ親しい相手とはいえ、迂闊うかつにそ

のことを口にするほど、大國は輕忽けいこつではない。

「で、汝等なれらは」

稲置は、やや躊躇ためらい、上目遣うめぢいに問うた。

「明日はいづくへ向かう」

「まずは伊賀」

大國は短く応えた。

「その先は、決めていない」

「では、すぐに吾が供部を、伊賀に派はそう」

稲置は立ち上がった。

「伊賀の郡司に、皇子を助け奉るよう、伝えておく」

その時、屋の戸が開いた。

さきほど、赤目の滝に大海人皇子を迎えに發ったはずの伴部が、蒼白の面差しあはで立っていた。

その背後に、鮎芽あゆめがいた。

声をあげる間もなかった。

稲置の伴部は膝を折まって床にくずおれ、屋に駆け入った鮎芽は、腰を浮かした稲置のふぐりを蹴り上げた。呻うめいてうつぶせに両手を突いた稲置の背にまたがり、その喉に短刀を突きつけた。

「動うごくな、声を出こゑすな」

鮎芽は、稲置の喉に刃を当てたまま低く囁ささやいて立ち上がり、叫こゑびかけた朴本大國を手で制し

た。

「汝も騒ぐな。この家の者に気づかれてはならぬ」

口を嚙んだ大國に、鮎芽は、倒れたまま両手で股間を抑え、細かく震える伴部に眼をやり、口早に言った。

「この伴部、大海人皇子のもとではなく、駅家に向かった。駅家には、甲冑を着けた兵が三十余、寝もせていた。この伴部を捕らえて責めた。駅家の兵どもは、大海人皇子が来れば、すぐにも討つべく控えていたと、すべて告げた」

「稲置、まことか？」

拳を握りしめて問う大國に、稲置は呻くように応えた。

「昨日、近江より官人が来た。皇子が来れば必ず捕らえ、抗えば弑殺し奉れと命ぜられた。官人は、吾が娘を質に取った。命を拒めば、娘は殺される」

鮎芽は、俯く稲置の髪を掴んで貌を上げさせ、問うた。

「近江の官人はいづくにある」

「伊賀の駅家に……吾が娘と共に……」

「伊賀の駅家には、幾人の兵ありや」

「近江の官人の兵は十人……おそらく、伊賀の郡司の兵と合わせて百……」

「名張の駅家にある兵は、近江の兵か？」

「否……すべて吾が兵……」

「ならば、疾う兵器を解かせ、各々の家に還せ」

稲置は黙した。鮎芽は短剣を動かした。喉の皮が切れ、血が滲んだ。稲置はびくりと身を震わしたが、黙したままだった。鮎芽は苛立たしげに言った。

「殺されたいか？」

稲置は、眼を閉じて応えた。

「近江に抗えば……吾が娘も殺される」

鮎芽の面差しが、一瞬強張った。唇がかすかに震えていた。

「鮎芽」

大國が口を開いた。

「稲置は吾が古くより睦んだ者。手荒な事はよせ。好んでしたわけではない」

「汝が娘……」

大國には応えず、鮎芽は稲置に問うた。

「歳は？」

「……九歳」

鮎芽は立ち上がった。剣を懐に収め、朴本大國に眼を向けた。稲置は床に臥せ、喘いだ。鮎芽は大國に言った。

「汝等は、この者が兵を家に還した後、馬を奪い、駅家を焼け。吾はこれより、伊賀に向かう」

「伊賀へ？」

大國は驚いて問うた。

「汝一人でか？」

「然り」

踵を返した鮎芽の腕を、大国は掴んで引き留めた。

「一人で何をする」

「名張と同様、伊賀の駅家を焼く。馬は野に放つ。吾等の動きが近江に知れるを遅らせねば、無事、濃に入ることは危うい」

「されど、何故汝一人で？」

大国は問うた。

「しばし待て。吾等も助勢する」

「頼りにならぬ者の助勢は、かえって妨げとなる」

鮎芽は冷たく突き放した。

「吾は土蜘蛛。独りのほうが動きやすい」

「されど……」

「分からぬか」

声を苛立たせ、鮎芽は言った。

「汝等と共に行けば、必ず気づかれる。気づかれれば……」

稲置を見やり、鮎芽は続けた。

「この者の娘は、必ず殺される」

大国は黙した。鮎芽は膝を折り、やっと半身を起こした稲置の肩を掴んだ。

「汝が娘、必ず連れ還る」

貌をあげて眼を見張る稲置に、鮎芽は続けた。

「されど、裏切れば、汝が娘は吾が殺す」

幾度も頷く稲置をしばし見つめ、鮎芽は立ち上がり、大国に向かって言った。

「伊賀へは、急かす、ゆっくりと来よ。馬蹄を響かせるな」

「鮎芽よ……」

大国は呟くように問うた。

「汝は土蜘蛛……何故に……」

「土蜘蛛は、長の命に随う。吾等が長が、鏡郎女か、あるいは安見娘であれば」

鮎芽は、冷ややかに言った。

「この家の者も、駅家の兵も、悉く殺していたであらう」

息を吞んで見つめる朴本大国に、鮎芽は面差しを緩めて続けた。

「されど、いまの吾等の長は額田郎女。いずれ、大海人皇子が国を統べる日のため、無用の恨みを残さぬよう、命ぜられている。さらに……」

俯いてしばし黙した後、鮎芽は言った。

「……吾は、九歳の時、親に棄てられし娘」

この頃、馬は数が少ない。郡司の地位にある稲置でさえ、飼っている馬は一頭であった。駅家には十余頭の馬がいたが、すべて、近江の内裏より遣わされ、郡司はそれを預かっているにすぎない。

その馬にまたがり、鮎芽は闇に消えた。

駅家の兵は家に還され、馬はことごとく、やがて稲置の家に現れた大海人皇子に献じられた。大海人皇子、讃良皇女、そして十人の舎人は馬にまたがった。三人の稚ない皇子は、舎人に抱かれ、相乗りとなった。

火を放たれ、炎を吹き上げる駅家を呆然と見つめていた稲置に、皇子は馬を寄せ、剣を与えた。「軍が鎮まった後、この剣を携えて吾がもとへ参れ。放った馬と焼いた駅家の費えを購う故に」

稲置は剣を押し戴いて拝礼し、一行は馬を進めた。

伊賀は、名張より川沿いの平らかな道を四十里（約22キロメートル）ばかり進んだ先にある。大海人皇子の一行は、鮎芽が言い残したとおり、ゆつくりと伊賀に向けて進んだ。

伊賀の地は、山間に開けた盆地で、名張よりも広く、里もそれなりに大きい。すでに夜は更け、白い月の皎々とした光のみが、一行を照らしていた。

十歳の草壁皇子、九歳の天津皇子、六歳の忍壁皇子、舎人どもの腕に抱かれ、揺れる鞍の上で眠りこけていた。舎人どもの面差しにも、憔悴の色が濃い。

「近江の官人が伊賀に入ったとなると……」

伊賀から三重に至るには、再び険しい深山が立ちふさがっている。伊賀で休むことがかなわねば、夜を徹して山路を進むしかない。

ただし、その前に伊賀の里を越えられるかどうか……。鮎芽が、みごと稲置の娘を助けたとし

ても、おそらくは百を越える兵が屯しているはず。彼等に気づかれずに抜けるのは難しい。

「如何する？」

ついに、伊賀まであと数里となった。河のほとりで馬を休めつつ、大海人皇子は一同を集めて訊ねた。

「待つしかあるまい」

讃良皇女が言った。

「やがて、鮎芽も戻ってこよう。伊賀の様が分からねば、策の練りようもない」

「いまだ行き会わぬとは……」

朴本大國が氣遣わしげに伊賀の方を見やった。

「まさか、しくじったのではあるまいか」

「言うて益なきこと」

大海人皇子は、腕を組んだ。

「讃良の言うとおり、ここは休もう」

三人の舎人に寝ずの番を委ね、舎人どもは思い思いに、木の幹に背をもたせかけ、あるいは草地に横たわった。

大海人皇子は、差し出された厚布にくるまり、手の届く傍らに剣を置き、岩の上に横たわった。その傍らに、しきりと眼をこする草壁皇子の手を引いて、讃良皇女が坐した。

「眼を覚ましたのか」

讃良皇女が坐すなり、その膝に頭を乗せ、膝につかまって寝入った草壁皇子の寝顔を、笑み

を浮かべて見入りつつ、大海人皇子は言った。

「慣れぬ旅ゆえに」

讃良皇女は、ほつれた草壁皇子の髪を指先で整えつつ応えた。

「生まれつきひよわな皇子。疲れて寝入っても、怖い夢を見てすぐに眼を覚ます」

「讃良よ」

大海人皇子は、白く輝く月を見上げて言った。

「吾もまた、ひよわな皇子であった」

讃良は微笑み、手を伸ばして皇子の頬を撫でた。

「その吾が今、近江に謀叛し、兵を動かそうと、かように山間の夜道を進んでいる……、不思議なものよの」

「ひよわ故に」

讃良は、月明かりに輝く川のせせらぎを見詰めつつ、言った。

「皇子は、変事にも巻き込まれず、生き延びた。まだまだ、生き延びねば」

この皇子のために……。そう呟き、讃良皇女が膝にすがって寝入る草壁皇子の肩を撫でたとき、舎人の声が響いた。

「舟が！」

一艘の小舟が、川面をたゆとう落ち葉のように、流れ寄せてきた。

大海人皇子も、讃良皇女も、おのおの兵器を手に、河原に集った。

闇夜に、松明もなく舟を漕ぐ。漁人のやることではない。

「あれは……」

眼を凝らしていた朴本大國が言った。

「鮎芽！」

たしかに、女であった。鮎芽が、河原に立ち並ぶ一行に面差しを向け、かすかに笑みを浮かべて舟を漕ぎ寄せた。鮎芽の足元に、一人の女童が、こわごわと坐していた。

舎人どもは、水飛沫をあげて川に駆け入った。

鮎芽は、舟底に立ったまま、漕いでいた櫂を棄てた。笑みを浮かべ、舟端に取り付いた舎人たちが、ひきずるように舟を河原へと運ぶのを見ていた。その舎人どもの中に、五十路に近い髭面の朴本大國がいた。

「大國よ」

不意に鮎芽が問うた。

「汝に娘はいるか」

「何故、問う」

舎人どもと並んで右手で舟端をつかみ、左手を泳ぐように振りながら、やかましく水音を立てて歩む大國の問いに、鮎芽は言った。

「まず、吾が問いに応えよ」

「三人いる」

大國は応えた。

「上の娘は、去年、子を産んだ」

「大事に」

言いつつ、鮎芽は舟底に倒れた。その背に、矢が三本刺さっていた。

「守れ」

「稲置の娘は、みごと随れ来たぞ」

俯せに臥せ、背に立った矢を引き抜かれ、孔から血を噴く傷口に藁草を摺り込まれつつ、鮎芽は呻いた。

「みごと、汝はなした」

傍らに坐し、朴本大国は言った。怯えきつて総身を強張らせた稲置の娘は、讃良皇女が抱きかかえ、撫でさすっていた。

「あまり喋るな」

「もはや助からぬ。死ぬ前に、言わねば……」

苦しげに喘ぎ、定まらぬ眼差しで鮎芽は続けた。

「近江の官人は、郡司の家にいた……女の手枕に、眠り惚けていた……稲置の娘は、隣の屋にいた……吾はまず、官人の屋に忍び入り……眠らせたまま、ふぐりを砕いて殺した……」

「殺したのか？」

大国の隣に膝を突いた大海人皇子が問うた。鮎芽は続けた。

「その後、駅家に忍び入った。駅家の庭には、百余の兵が屯していた。まず、すべての馬を解き

放ち、火を放った……この娘を馬に乗せ、駆けようとして背に矢を受けた……それでも駆け、舟を奪って……」

鮎芽は腕を伸ばし、皇子の袴の膝を掴んだ。

「皇子よ……、やがて、伊賀の兵ども、吾を追って来よう……されど、……伊賀の郡司も、郡司の伴部どもも、陰では口々に近江の官人を罵っていた……、かの官人が死んだ上は、伊賀の郡司に、皇子を捕らえ、あるいは討つ意はあるまい……、故に説け……説いて、伊賀の郡司を助勢させよ……あるいは、稲置の娘を還せば……名張の郡司もまた……皇子に助力を……」

「諾」

皇子は深く頷き、鮎芽の手を握った。鮎芽は、安堵したように面差しを緩め、それとともに喘ぎはますます激しくなった。

「もし、吾が不破まで至ることあれば、一の功は汝にある」

そのまま、鮎芽は息絶えた。その亡骸を前に、眼を閉じて 誄を唱え、やがて立ち上がった大海人皇子は、朴本大国に言った。

「稲置の娘、汝が随れて名張へ行け」

「諾」

眼の涙を拭い、朴本大国は讃良皇女に抱かれていた九歳の女童を馬の鞍に乗せ、名張へと向かって去った。

「讃良皇女よ」

大国を見送りつつ、大海人皇子は問うた。

「吾が、伊賀の郡司を説き、郡司どもは吾に服するであろうか」

「伊賀の民を服せしめずして……」

讚良皇女は、声を励ました。

「日本の民を統べられようか」

「然り」

皇子は頷き、舎人どもに命じた。

「枝を集めて松明となせ。盛んに火を焚き、堂々と伊賀へ入る」

黒煙を噴き上げる駄家から放たれ、里じゆうを駆け回る十数頭の馬を追って右往左往していた伊賀の兵どもは、不意に闇のなかに、あかあかと燃えさかる松明を掲げ、横一列に並び、肅然と進んでくる大海人皇子の一行に、眼を見張った。

「伊賀の郡司やある。出で参れ！」

里の中央に、渠をめぐらせ、三箇所から湧き出でる水を走らせ、諸処に石を並べた広庭がある。広庭の間近まで馬を進め、舎人どもが口々に叫んだ。伊賀の兵どもが矛を携えて駆け集まった。

「汝等は？」

「大海人皇子である」

その名に、伊賀の兵どもは互いの顔を見やった。やがて、兵どもに左右を守られ、伊賀の郡司が現れた。

「伊賀の郡司か」

大海人皇子は、馬前に拝跪する郡司にたかだかと告げた。

「近江の大友皇子が、左大臣蘇我赤兄を誅殺し、倭媛皇后を押し込め奉った」

郡司は貌を上げ、驚いた面差しで左右を見回した。皇子はさらに声を励ました。

「さらに、飛鳥留守司に命じ、吾を討たんとした。あるいはすでに、この伊賀にも近江の使が来たりて、吾がこの地に現れることあらば討てとの命が下っておろう」

皇子は馬を降りた。自らの長剣を抜き、その束を伊賀の郡司に突きつけた。

「伊賀の者が、近江に随うとの意ならば、躊躇うことなく、ここで吾を刺せ」

伊賀の郡司は、眼を見開き、突き出された剣の束と、皇子の貌を交互に見た。

「されど……」

皇子は続けた。

「大友皇子は、唐の皇帝の意を受け、再び水軍を興して新羅を滅ぼさんとしている」

郡司の背後で、兵どもがざわめいた。かつて、葛城皇子が百済に請われ三韓に出兵した折、伊賀の者も数十、徴されて海を渡った。還り来たった者はわずかに五、六。

「もし、新羅が滅びれば如何なるか。かつて唐は、新羅とともに百済、高句麗を滅ぼした。その唐が新羅を討とうとしている。新羅が滅びれば、ともに戦った吾らを討とうとするに相違なし。そうなれば、伊賀の里にはさらに重い税が課せられ、さらに多くの者が兵に徴される」

いつしか、兵のみならず、兵器を帯びていない民どもも、家より出でて、皇子の言に耳をそばだてていた。四十半ばの郡司は、唇を引き結び、眼差しをやや伏せがちに、考えを巡らせていた。

「吾は今宵、伊賀の里の外れにて寝む。汝等が近江に随い吾を討つ意とあらば、如何ようにも

せよ。されど」

皇子はひときわ、声を張り上げた。

「吾とともに、苛政をなす近江を覆滅し、国の乱れを正すの気概があらば、ともに来よ」

ざわめいていた伊賀の民が、口を噤んだ。風に揺れ、闇夜に火花を散らす松明のはぜる音のみが響いた。民の眼差しは、皇子ではなく、彼等の長である郡司に向けられていた。そして郡司は、総身を強張らせ、黙したままであった。

「行くぞ」

大海人皇子は、左右の舎人どもに声をかけ、馬首を里の外れへと向けた。馬蹄を轟かせて広場を去る皇子の一行を見送りつつ、伊賀の民どもは郡司を囲み、口々におめきはじめた。

伊賀の里からさらに二十里（約10キロメートル）を東へと進むと、人家は絶え、険しい鈴鹿の山々が闇夜に峯を連ねて左右から迫り、やがて一行を包み込むように立ちふさがった。

鈴鹿の向こうは尾の国。尾を宰領する小子部鉤鉤は大海人皇子と親しく、かつて讚良皇女を密かに匿っていた。すなわち鈴鹿を無事に越えれば、虎口を脱したも同じである。

夜明け前よりひたすら吉野の山路を越え、さらに名張から伊賀の外れまでの六十四里を歩いてきた一行は、すでに疲れも甚だしく、馬上で昏睡し、転げ落ちる舎人も少なくはなかった。

「このあたりはなんとという」

大海人皇子の問いに、舎人のひとりだが、「積殖」と応えた。

「家はあるか」

「知らず」

川のせせらぎが聞こえてきた。幅は二歩（約4メートル）か三步か。歩いて向こう岸まで渡るほどの浅さ。東の鈴鹿の山より水が流れ来たっていた。

「家がなければ、夜明けまで、この河原に停まろう」

大海人皇子の声に、舎人どもは一斉に馬を降り、川の瀬へと駆けた。せせらぎに口をつけ、渴いた喉を潤す。そのまま貌を流れに浸したまま動かなくなった舎人を、傍らの者が抱き起こすと、大きな躰をたてて、寝入っていた。

松明を絶やすな。年かさの舎人が叫ぶ。火を絶やすと、山犬が降りてきて襲いかかってくる。

「されど……」

若い舎人が口ごもった。

「もし、伊賀の者が攻め来れば……」

あかあかと燃える松明の火は、かっこうの目印となるのではないか。

「皆、ここへ」

若い舎人の声を耳にして、大海人皇子は舎人どもを集め、輪の形に座らせた。讚良皇女は、輪からやや離れ、眠りこける稚ない皇子どもに衣をかけ、その傍らに坐している。

「人々よ」

大海人皇子は、舎人の一人ひとりの貌を覗き込むように見つ、言った。

「もし、伊賀の者が攻め来ることあらば、吾を守るなかれ」

驚いて膝を進める舎人どもを制するように、皇子は続けた。

「さらに、皇子どもを守るなかれ。讃良皇女をも守るなかれ。ただ、一散に鈴鹿の山を目指して駆け、必ず、濃に至って軍を興せ」

舎人どもは互いの貌を見やった。離れて讃良皇女が、膝に頭を乗せて寝入る草壁皇子の肩を掴んだ。

「されど……」

年長の舎人である朴井雄君が、唇を震わせて問うた。

「皇子を見捨てて逃げた後、吾らはどの御方を主として奉れと……」

「高市皇子」

大海人皇子は、眉ひとつ動かさず言った。大海人皇子が胸形君の娘に産ませた十八歳の皇子。

吉野に伴うことは赦されず近江に留められている。もし、大友皇子が事を起こせば、すぐさまに吉野へ来るように伝えてはある。

その性は剛毅にして慧く、たしかに将として仰ぐにふさわしい。しかし……。舎人どもは思った。高市皇子が、無事に近江を脱し、吾らと落ち合えるとは限らない。その折には……。

雄君はためらいがちに口を開いた。

「もし、高市皇子が近江の兵に捕らえられ、あるいは誅殺されることあらば……」

「皇子よ」

さえぎる声に振り向けば、いつしか讃良皇女が、舎人どもの輪のすぐそばに歩み寄っていた。

「皇子が弑殺され、吾が逃げおせれば如何」

澄んだ眼差しで問う讃良皇女に、大海人皇子は笑みをもって返した。

「軍略はすべて、讃良皇女の随え」

「孫子の軍略はかように」

讃良皇女は懐から巻物を取り出して舎人どもに示した。

「吾が懐中にあり。誤るまいぞ」

舎人どもは笑い、大海人皇子も笑い、皆、寝ぬ、寝ぬの番はいらぬ、と川原に横たわり、肘を折って手枕とした。舎人どもは、思い思いの場に臥した。

独り、讃良皇女は坐したまま、大海人皇子の傍らにいた。

「汝は寝まぬのか」

臉をわずかに開けた皇子の問いに、讃良皇女は応えた。

「皇子が弑殺されようと、吾は死なぬ。生きて、必ず近江を滅ぼす」

「汝こそが」

皇子は臉を閉じつつ呟いた。

「国を統べるにふさわしいのかもな」

「否……」

讃良皇女の呟きを、大海人皇子は夢うつつの裡に聞いた。

「伊賀の郡司に賜った言……皇子こそ、国を統べるにふさわしい御方になりたもうた」

皇子の臉が再び開いたとき、傍らに讃良皇女はいなかった。身を起こせば、やや離れて、稚ない三人の皇子を守るように臥せている。

すでに闇は霽れかけていたが、いまだ陽は昇らず、川面から立ち上る朝霧が四圍の景色を朧に包んでいる。

夜気と硬い石の上でのまどろみが、四肢のあちらこちらを軋ませていた。

喉の渇きに、大海人皇子は水を求め、よろぼうように河辺に歩んだ。

朝霧の細かな水滴が頬を打つ。せせらぎが次第に近づき、足元に水の流れが映った。

膝を屈め、双の手を合わせて水を汲もうとしたとき、皇子は、煙を上げるように靄る川面に立つ人影に、思わず立ちすくんだ。

巫那……。

茜色に染まった東の山の端から貌を覗かせた日輪の光を浴びて、黒々とした川面にすつくと立つ乙女の影が浮かび上がっていた。

こちらに背を向けた乙女の影から、光の波が鮮やかに四方に発せられていた。

あれは……。

二十四年の昔、海面より昇る日輪の光を受けて輝いた巫那の姿。「日輪の女神の御姿を見せよう」。巫那はそう言い、皇子や舎人どもを浜に誘った。

神さびてある。そう言ったのは、村国男依であったか、海部石床であったか、朴本大国であったか。

水音が響いた。乙女の傍らに、朝霧を分けて、健やかな男童の影が立った。

男童に貌を向け、乙女は笑った。確かに笑った。

かつて、巫那が皇子に見せた、邪気のない笑顔。

巫那がかつて、伊勢の海部の邸内に設けられた宮で語った、神々の物語が脳裡に浮かんだ。

……天地分かれての地、二柱の神が生まれいでき。一柱を伊邪那岐、一柱を伊邪那美。二柱の神が天日鉾で国を造りたまいて後、さらに二柱の神生みたまいき。一柱は姉なる天照、一柱は弟なる素戔嗚……。

そう、天照こそが、日輪の女神。天地の狭間に生きとし生ける者すべてのために、弘暁とともに出でます女神。

その女神の姿を、皇子は巫那に見出した。その日、皇子は巫那と、初めてまぐわった。

……まぐわいこそ、政事。

蘇我鞍作が、得たり貌で述べたその言。確かにまぐわいこそ政事。その言に随い、多くの女に多くの子を生ませた。

しかし……。

伊勢で巫那と語り合った日々。十市の里で、微笑む額田郎女に見守られつつ、十市皇女や讚良とともに鞆を蹴りあつた日々。

生きる歓び。

その歓びゆえに、辛く、血なまぐさく、謀の張り巡らされた世を生き抜いた。

あの歓びを、再び、己が手に取り戻すために。

そう。

巫那と過ごしたあの日々を……。

「亜那！」

搾り出した叫びは、こちらを向た男童の声に、かき消された。

「父なる皇子よ！」

水飛沫をあげて駆け寄った男童の貌に、大海人皇子は吾に還った。

「高市皇子か！」

「久しく、父なる皇子よ」

河原に膝を突いて拝礼する高市皇子の肩を双の手で掴み、大海人皇子は叫んだ。

「高市皇子よ、何ゆえここに」

「かの土蜘蛛の導きにて」

高市が指さした方に、膝まで川の水に浸し、稚さなさの残る面差しを向け、大きな眼はやや眠たげに、口を半ば開いている乙女がいた。

「汝が名は」

「瀬莉」

大海人皇子の問いに、十五か六の土蜘蛛は、瀬の流れに足を浸して立ったまま、澄んだ声音で応えた。高市皇子が、大海人皇子なるぞ、と告げると、慌てて川から走り出で拝礼した。

「よくぞ、高市皇子を導き、吾等を参偶せしめた」

大海人皇子は、自ら膝を突き、瀬莉の肩に手をかけて言った。

「いづくの路を通ってきたのか」

「鹿深を越えてきた」

鹿深は、伊賀の北、近江より南の山地。大友皇子らが蘇我赤兄を誅殺し、倭媛皇后を押し込め奉ったと知った高市皇子は、あらかじめ決めていたとおり、まず飛鳥へ至つて後、吉野に入ろうと、飯宮を出で、舎人の置始比等の家に向かった。置始の家には、飛鳥にある藪環から派された瀬莉がいた。瀬莉は、数日前より、飛鳥留守司が密かに兵を集めていることを伝えた。

まっすぐ飛鳥へ入れば、留守司の軍に捕らえられる恐れがある。最年長の舎人であり、近江にあった置始比等はそう断じた。別の路を通り、まっすぐ尾に抜け、村国男依や海部石床らが濃尾を宰領する多品治、小子部鉤鉤とともに集めつつある東国の軍と合流すべきである、と。

瀬莉は、鹿深の山を抜けて近江から南へ至り、伊賀から東へ向かう路を勧めた。常に近江、難波、箸墓の間を往還し、時には東国にも足を延ばしていた瀬莉は、さまざまな道に詳しい。無事に鹿深を越え、高市皇子の一行を伊賀へと導いた……。

物怖じせずに語る瀬莉のあどけない貌に、かつての亜那の面差しを重ねつつ聞き入っていた大海人皇子は、

「もし、軍に勝つことあらば、汝が功は大きい」

と言ひ、ふと見回すと、川原では、大海人皇子が随っていた舎人どもと、高市皇子とともに来たった舎人どもが、互いに抱き合い、無事を喜び合っていた。その数は合わせて二十。危地を脱したわけではない今、少しでも伴の頭数は欲しい。

「さらに高市皇子よ」

大海人皇子は、いまや父よりも背丈のある己が子を見つめて言った。

「これより、汝を大將軍とし、采配を委ねる」

「吾に？」

驚く高市皇子に、大海人皇子は説いた。

「吾は、濃に至りし後、天皇の御位に即く」

「天皇の……」

「然り。そのまま濃の国を動かず、天皇としての政事を行い、まず東国の地を固める。軍の事は汝に任せる。必ず近江を討て」

いつしか、大海人皇子の傍らに、讃良皇女が立っていた。拝礼する高市皇子に笑みを見せた後、讃良皇女は告げた。

「朴本大國が還ってきた」

振り返れば、朴本大國が馬より降り、皇子に向かって拝跪していた。

「大國よ、よくぞ還った」

夜通し眠らずに馬を走らせたらしく、憔悴しきった大國に、大海人皇子は駆け寄って問うた。

「稻置の娘は、無事に名張へ送り届けたか」

肩で息をしつつ頷いた大國は、やがて面差しを上げ、告げた。

「昨夜の裡、名張と伊賀の郡司が談合し、二百の兵と五十の弓、五百の矢、さらに楠、干し魚等の糧、秣を皇子に献じると……」

おお……。舍人どもがどよめいた。大國はさらに言った。

「すでに、二百の兵ども、伊賀の里を発ち、こちらに向かいつつあり」

沸き立つ舎人どもの間にあつて、大海人皇子は、ぎこちなく拝跪する瀬莉に眼をやって言った。

「土蜘蛛の乙女よ。汝と同じ土蜘蛛なる鮎芽……」

「鮎芽が？」

貌を上げて問う瀬莉に、皇子は眼を潤ませた。

「鮎芽は昨夜、独り伊賀に忍び入り、近江の官人に質に取られた名張の郡司の娘を救い出した。

されど、敵の矢を浴び……」

眼を見張って立ち上がった瀬莉に、皇子は続けた。高市皇子や舎人どもは、それぞれ近くの樹に昇り、伊賀の里からこちらに向かつてくる二百の兵の姿を眼にし、歎声を上げていた。

大海人皇子は俯いて声を搾り出した。

「ついに死んだ」

「鮎芽が……」

声を震わせた瀬莉の肩に手を載せ、

「伊賀や名張の郡司が吾等に味方したは、鮎芽の勲功である」

そう告げて、皇子は、川へと歩んだ。

いつしか、山の端よりその姿を現した日輪の光は四方に発せられ、朝霧を破り、四圍を金色に照らし出した。大海人皇子は、背の流れに膝を浸し、双の手について日輪の伏拝し、叫んだ。

「日輪の女神よ」

讃良皇女も、高市皇子も、舎人どもも皆、川に臥して叫ぶ大海人皇子に眼をやった。

昇る日輪の光を浴び、皇子は続けた。

「もし吾、軍に勝つことあらば、日輪が遍く天地を照らすごとく、諸々の地の民を撫育し、

皇族相扶けて争わず、平らかに政事を行うことを盟う。この盟いのごとくあらざば、吾が身命滅び、子孫絶えむ。忘れじ、失たじ！」
それは六月二十五日の朝であった。

同じ朝。

近江の内裏。寢殿の奥なる倭媛皇后の寢屋には、押し込められた十数の女たちが、所狭しと床に臥し、まどろんでいた。

ひとり、半身を起こしたのは十市皇女。

窓を閉め切った暗い寢屋に、一筋の光が差し込んでいた。見れば、窓を覆う木板の隙間より、陽光が漏れ入っている。

もはや朝……。

大友皇子の軍に拉致され、寢殿に押し込められて三日目の朝であった。食と水は与えられたが、寢屋より外に出ることは赦されず、身動きもままならぬなかで肩を寄せ合い、ひたすら凝つとして時の流れるを待つことは、意想外の苦しみであった。

十市皇女の子、葛野皇子は押し込められて二日目に熱を發した。倭媛皇后が強く言い張り、三歳の葛野皇子のみは内裏を出ることを赦され、今は、近江の蘇我安麻呂の邸に預けられた。安麻呂は蘇我果安の同族だが、不遇をかこち、それ故に大海人皇子にも内通していた。

安麻呂の邸ならば心強かろうと倭媛皇后は慰めてくれたが、傍らに臥しているはずの吾が子の不在は、十市皇女の胸を締め付けた。

四肢の節々の痛さは、きょう一日、同じようにただ、身を強張らせて過ごすことになることを思わせ、心が萎えた。

十市皇女は、窓の木板の隙間から差し込む光が、仰向けに伏せた額田郎女の、布で覆われた貌を照らしていることに気づいた。

額田郎女が、かすかに呻いて身じろぎした。唇が苦しげに開いて震えている。

水か……。傷が熱を發し、喉の渴きを耐え難いまでになっているのであろうか。

寢屋の隅に、水をいれた甕が置いてあった。皇女は立ち上がり、傍らに臥す女嬬どもを踏まぬよう目を配りつつ、ゆっくりと甕に歩み寄った。両手で水をすくい、こぼさぬように額田郎女の側へ行った。

母なる郎女の唇に手をあてがい、水をしたたらせた。わずかに頬にこぼれたが、郎女は喉を鳴らして水を呑み、深い吐息を漏らした。だが、やがて四肢を震わせ、あえぎ始めた。左右の手が宙を彷徨い、やがて布に覆われた貌をかきむしった。

傷が痛むのか？

額田郎女は、気づかれずに十市皇女とともに内裏に随行するため、己が貌を剣で裂いた。皇女の胸が、大きな手で驚掴みにされたように締め付けられた。

ふたたび立ち上がり、己が袖を裂いて甕に浸し、再び郎女の傍らに戻り、貌を覆う布をはずした。傷を水で拭えば、少しでも痛みが和らぐのではないか。

だが、あらわになった母なる郎女の貌を見た皇女は、声にならぬ叫びをあげ、床に双の手をついた。

額田郎女の貌は、三筋の傷跡があった。右の頬から左の額へ。左の耳から、唇にかけて。右のこめかみから、顎にかけて。高句麗の医人に糸で縫われたそれぞれの傷は、今にも開きそうに腫れ上がり、膿を垂らしていた。整っていた鼻梁は歪み、眉や眼は引き攣れてせり上がり、もはや傷が癒えても、かつての美しさは損なわれるであろうことは明らかだった。

母よ……。

十市皇女は、激しく首を振り、唇を動かして叫ぼうとした。だが、叫びは声にならず、身の裡より湧き上がる苦しみは、放たれぬまま渦巻いた。

何故、今になって己が身を傷つけてまで、吾を守ろうとする。
かつて、守ってほしかったときではなく。

「十市皇女よ」

静かな声に、俯いて肩で喘いでいた皇女は、眼差しをあげた。

額田郎女は、床に坐し、漏れ入る陽の光を見詰めていた。その右の手に、十市皇女が甕の水に浸した袖の端切れが握られていた。自ら傷口の膿を拭いたらしく、端切れは赤黒く染まっていた。陽の光に照らされ、金色に染まった郎女の横貌は、生々しい傷跡にもかかわらず、神々しいまでに澄み切っていた。十市皇女は、身を起こし、まざまざと、母の傷ついた貌を見詰めた。

額田郎女は言った。

「新たな一日。希みは捨てまいぞ」

「希み……」

「汝が父なる皇子は」

郎女は、窓の木板の外で輝く日輪を見透かすかのように、眼差しを輝かせて続けた。同じ日輪を、いずくかにある大海人皇子もまた見つめているであろうと思いつつ。

「必ず、吾等を助ける」

昨夜、皆が寝入った後、土蜘蛛の一人が、この寝屋に忍び入った。大海人皇子はすでに吉野を脱した。高市皇子もまた、父を追い、伊賀へと向かった。そう報せてきた。

静かに告げる母の言に、十市皇女は、問い返した。

土蜘蛛が……この内裏に？

然り。

額田郎女は頷いた。

大友皇子に勝つために、練るべき謀はすべて練った。今は耐えて、待て。

その日、すなわち六月二十五日。

二百余となった大海人皇子の一行は、鈴鹿の山を越え、二十六日、三重に至った。出迎えた海部石床率いる伊勢の兵千人とともに北上し、尾の国の桑名に入り、小千部鉦鉤の兵千と合流。

翌二十七日、一行はついに濃の国に入り、不破へと至った。不破にはさらに、村国男依が近で集めた千の兵とともに待っていた。大海人皇子は、三千余の兵を得た。

不破より西へ三十里（約15キロメートル）進めばすでに淡海。淡海の岸づたいに百里（約50キロメートル）を下れば近江京。進軍を遮る険路はない。

大海人皇子は、この不破の地で天皇の高御座に即くと宣し、仮拵えの宮で、儀式が行われた。

尾の国みら熱田の郡司より献じられた剣と鏡、そして勾玉が、不破の仮宮に集い来たった群臣によって、大海人皇子に捧げられた。

日輪の女神である天照が、岩戸に籠もった折り、わずかに開いた隙間から差し入れられ、そこに映った己の貌に、外に引き出され、再び世に光が満ちたと言われる八咫鏡。

岩戸の前で踊った天宇受女が、榊の木に懸けたと言われる八尺瓊勾玉。

天照の弟神なる素戔嗚が、八岐大蛇を討ち滅ぼした折り、その尾より出でし草薙の剣。

もはや、七枝の剣は要らない。かつて巫那が語った、稗田の家に伝わる古の物語を礎とし、大海人皇子は新たな御稜威を築こうとしていた。そして大海人皇子は自らを、この世界を創造した神々の後裔であると宣したのであった。

儀式果てて後、皇子は濃尾の諸処に使を派し、広く参軍を求めた。郡司どもは、兵と食を献じ、武装した人々は列をなし、陸続と不破へと向かった。